【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	青　森　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	浪岡町立女鹿沢小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	１	２	１	１	２	１	９	１５
児童数	３０	２８	４７	２８	３７	４１	１	２１２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力を向上させるための個に応じた指導のあり方 Ⅱ
～国語・算数を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・１～６年　算数
（子どもの理解度に差が出やすい教科であり、学年毎の基礎・基本の定着が求められるため。また、学校として、当該教科に関する研究実績があり、昨年度に引き続いて研究を進めていくことが必要と判断したため。）
・１～６年　国語〔言語事項を中心に〕
（確かな学力を向上させるためには、学習全般に影響を及ぼす中心教科と考えられるため。特に、言語事項は国語科の基盤をなす領域と考えられるため。）

(2)　年次ごとの計画

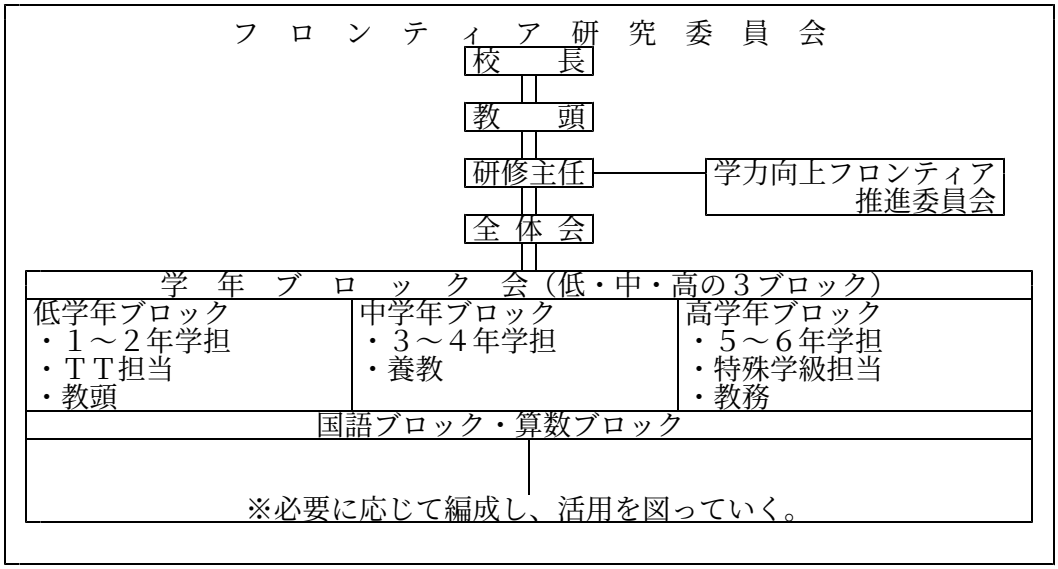
平成14年度	○テーマ 確かな学力を向上させるための個に応じた指導のあり方 ―国語・算数を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して― ○仮　説 １　少人数学習・習熟度別学習などの個に応じた指導方法・指導体制を工夫改善することによって、児童の意欲的な活動を促し、一人一人の考え方や多様な学習活動に対応した指導が可能になり、基礎的・基本的内容の定着が図られ、確かな学力を身に付けさせることができる。 ２　評価を指導に生かすことによって、確かな学力を身に付けさせることができる。 ○研究内容・方法 １　内　容 （１）教科の特性に応じた基本的指導法 （２）個に応じた指導 （３）評価方法と評価を生かした指導のあり方 （４）朝読書・ドリルタイムの工夫改善 ２　方　法 ・全学級で提案授業を実施し、研究を深める。 ・３年以上の算数は、ＴＴの指導体制で臨み、日常実践に努める。

平成15	○　テーマ 確かな学力を向上させるための個に応じた指導のあり方 Ⅱ ～国語・算数を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して～ ○　仮　説 １　少人数学習・習熟度別学習などの個に応じた指導方法・指導体制を工夫改善することによって、児童の意欲的な活動を促し、一人一人の考え方や多様な学習活動に対応した指導が可能になり、基礎的・基本

年 度	的内容の定着が図られ、確かな学力を身につけさせることができる。 ２　評価を指導に生かすことによって、確かな学力を身につけさせることができる。 〈具　体　仮　説〉 ・単元の全体計画の評価規準及び評価基準の設定 ・１時間単位ごとの指導計画に設定された「具体の評価」の設定 ・指導の実際で「具体の評価」に続く「評価を生かした指導」のあり方 ・名列表や座席表などの補助簿の活用 ・児童がノートに記入した学習感想の活用 ○　研究の内容・方法 １　内容 （１）確かな学力をより一層身に付けさせるための少人数学習・習熟度別学習 ①国語科（言語事項を中心）における指導 ②算数科における指導 （２）個に応じた指導 ①少人数学習や習熟度別学習の効果的な指導 ア）学習内容に応じた弾力的な指導体制のあり方 イ）教育ソフトやＯＨＣ等の教育機器の活用 ウ）興味関心別選択学習のあり方 ②個に応じていくための学習過程 ア）レディネステストの活用 イ）多様な学習方法の場の設定 ウ）意欲を喚起する教材提示の仕方 （３）評価方法と評価を生かした指導のあり方 ①単元全体を通した評価と補助簿の活用 ②指導に生かす自己評価のあり方 （４）個に応じたドリルタイムと補充学習の工夫 （５）拡大校内研（公開発表会）に向けての取り組み ①少人数学習や習熟度別学習の指導案様式の見直し ②年間指導計画の見直し ２　方法 ・日常実践に基盤を置く。３年以上の算数はＴＴの指導体制で臨み日常実践に努め（２年以下は必要に応じてＴＴの指導体制を組む）、国語は言語事項を中心として、年間指導計画に基づいたＴＴの指導体制を組む。 ・検証性のある授業を公開し、研究協議をもち授業の改善に努める。 ・個人研究を基にして共通の目的に向かって研究を進めていく。

平 成 16 年 度	○　テーマ 確かな学力を向上させるための個に応じた指導のあり方 Ⅲ ―国語・算数を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して― ○　研究の見通し ※仮説は、平成１４・１５年度と同じ ○　研究の内容・方法 １　内　容 （１）確かな学力をより一層身に付けさせるための少人数・習熟度別学習 （２）個に応じた指導 （３）評価方法と評価を生かした指導のあり方 （４）個に応じたドリルタイムと補充学習の工夫 （５）公開発表会に向けての取り組み ※研究内容や方法の詳細は、平成１５年度の成果と課題を受けて決定 ２　方　法 ※方法は平成１５年度のものを基本とする。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）拡大校内研を中心とした授業研究

平成１５年１０月に、主に町内の小中学校を公開対象として拡大校内研を開き、研究目標や仮説に基づいた授業を公開した。

公開した授業は、２年算数・３年国語・５年算数の３授業だったが、それぞれが研究仮説や研究内容に関連した授業を提案することができた。

〔提案の特徴的な部分〕

２年算数…研究内容「教育ソフトやＯＨＣ等の教育機器の活用」に関連して、Ｗｅｂ教材を活用した授業

３年国語…研究内容「国語科（言語事項を中心）における指導」に関連して、主語・述語についての習熟度別３コース授業

５年算数…研究内容「算数科における指導」に関連して、習熟度別２コース授業

授業後の研究協議や参加者へのアンケートで貴重な意見を多く得ることができ、これまでの研究成果の確認とこれからの課題克服に役立てることができた。

授業研究全般を通しては、日常実践を研究の基盤において、毎日の授業を計画・実践していく中で、仮説に基づく様々な指導方法の実践や評価を指導に生かす具体的な実践が国語、算数の両面から行われてきた。その中で、工夫改善をすることにより児童がどう変容したかを具体的に検証する場をもち、協議をしてきている。協議の積み重ねにより、確かな学力について、具体的方策についての一層の共通理解を図ることができた。

（２）客観的データを基にした検証

①ＴＫ式学習進度検査結果から

平成１５年２月に実施したＴＫ式ＤＲＴ観点別到達度学力検査結果を全国と比較して各学年ごとに今年度の確かな学力向上に向けての学習の課題となる領域は、以下のように出た。

・２年…（国）言語事項
　　（算）表現・処理
・３年…（国）読む能力、関心・意欲・態度、言語事項
　　（算）表現・処理、知識・理解
・４年…（国）言語事項
　　（算）表現・処理、知識・理解
・５年…（国）読む能力
　　（算）知識・理解
・６年…（国）関心・意欲・態度、書く能力
　　（算）表現・処理、数学的な考え方、知識・理解

国語においては「言語事項」、算数においては「表現・処理」の領域が課題として多く出ている。

国語と算数については、指導方法や指導体制の工夫・改善を中心に、課題解決のために日常の実践に取り組んできた。児童の伸びを測る客観的データとして、算数の表現・処理の領域についてだけであるが、ＴＫ式学習進度検査の結果がある。同一学年の昨年度と今年度の比較である。（毎年３学年以上に実施している検査なので、比較できるのは今年度の４学年以上からになる。比較したのは、各学年の標準得点である。）

〔ＴＫ式学習進度検査の各学年標準得点の比較　〕

	３　　年	４　　年	５　　年	６　　年
平成１５年度	５３．０	５１．０点	４９．７点	４８．６点
平成１４年度		５０．９点	４９．９点	４４．４点

前年度と比較すると、全体的に得点が上昇していることが分かる。また、個人個人の数値をみると、４学年以上では、オーバーアチーバーが大幅に増加し、逆にアンダーアチーバーが減少していた。

〔ＴＫ式学習進度検査のオーバー及びアンダーアチーバー人数〕

	オーバーアチーバー （学力期待値７ポイント以上）	アンダーアチーバー （学力期待値７ポイント以下）
平成１５年度	２５人	２１人
平成１４年度	１６人	２８人

様々な観点から結果を分析することで、全体的傾向や児童一人一人の伸びを把握することができた。

②「チャレンジテスト」結果から

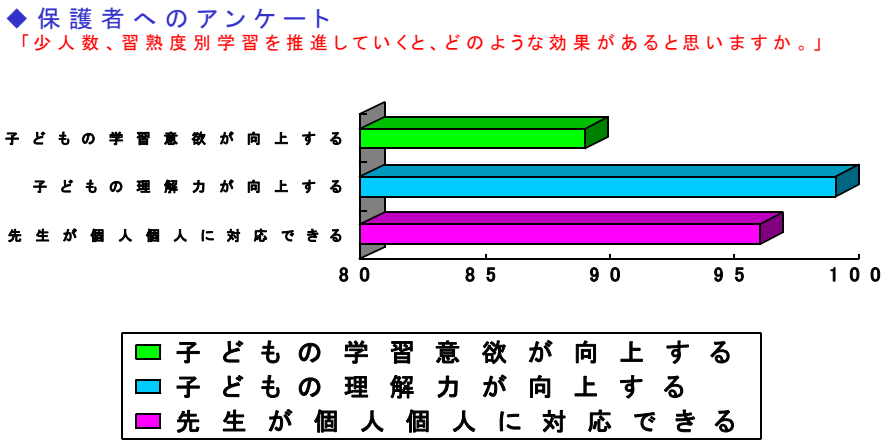
本校ではドリル等の繰り返し学習を中心とした「ドリルタイム」や補充的学習を中心とした「女鹿小タイム」などを日課に組み、日常の実践に取り組んでいる。今年度からは、毎学期後半に「チャレンジテスト」を、同一問題で１ヶ月程度の間隔を置いて２回実施している。同一問題で２回実施する主な目的は、基礎・基本の一層の定着と児童自身が目的意識を持って意欲的に学習に取り組んでほしいと考えてのことである。テストは、漢字の読み書き、計算の３種類である。

２回のテスト結果に対しては、満点をとった児童に「満点賞」の賞状、満点はとれなかったが１回目のテストより２回目の成績が上がった児童に「アップ賞」の賞状をあげて、意欲づけに心がけている。

	「満点賞」の割合	「アップ賞」の割合	「賞なし」の割合
１学期	７７％	１９％	４％
２学期	８２％	１７.５％	０.５％

今年度の１学期と２学期のそれぞれの賞の状況を確かめたところ、「満点賞」を獲得する児童の割合が上昇し、賞をとれなかった児童の割合が減少した。チャレンジテストを実施した結果、児童が意欲的に学習に取り組み、基礎・基本の定着に貢献することができた。

③保護者へのアンケート結果から



昨年度は、指導体制や指導方法の工夫改善について、児童にアンケートを実施したが、今年度は保護者に少人数・習熟度別学習についてアンケートを実施した。上にあるのがその結果であるが、概ね理解を示してくれている結果が出た。特に、「少人数、習熟度別学習は子どもの理解力が向上する」と考えている割合がほぼ１００％に近い数字が出た。

指定最終年度の来年度に向けて、保護者の更なる理解を得ながら学力向上フロンティア事業を推進していきたい。

２．今後の課題

これまでの研究経過を踏まえ、日常実践を研究の基盤に置き、仮説の具体的な検証を続けていくという研究の方向性には基本的には変更がなく、今後もより具体的な検証を継続していくことになるが、その中でも以下のようなことが課題として考えられる。

・国語・算数の教科の特質に合った基礎的指導法を基盤に研究を推し進める。
・児童の実態に即した主体的学習を促す学習過程と指導法をさらに研究していく必要がある。
・限られた職員数でのＴＴ指導体制の確立や、事前・事後の打ち合わせ時間の確保が容易ではない。
・これまで取り組んできた研究と「確かな学力」の関連をとらえ、より具体的な検証をしていく必要がある。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

・定期的な学力調査の実施
（１）平成１４年１１月　ＴＫ式学習進度検査（算数の計算領域）
（２）平成１５年　２月　ＴＫ式ＤＲＴ観点別到達度学力検査
（国語・算数・社会・理科）
（３）平成１５年１１月　ＴＫ式学習進度検査（算数の計算領域）
（４）平成１６年　２月　ＴＫ式ＤＲＴ観点別到達度学力検査
（国語・算数・社会・理科）

※ＤＲＴ観点別到達度学力検査は、現段階では平成１６年２月実施分の結果が出ていないため、前年度と比較して判明した課題等は、結果が分かり次第、研究に活用していく。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１　実施されたもの

（１）平成１５年　３月　平成１４年度の「校内研修のまとめ」発行。関係機関へ配布。

（２）平成１５年　４月　学習参観日において、保護者に向けて経過報告会の実施（ＴＴ指導に関する児童のアンケート結果の説明と少人数学習・習熟度別学習への理解）

（３）平成１５年　５月　小・中学校教務主任研究協議会における発表。

（４）平成１５年　７月　管内小・中校長研究協議会における発表。

（５）平成１５年　７月　学力向上フロンティア事業についての保護者対象のアンケートの実施

（６）平成１５年１０月　町内小中学校を対象にした拡大校内研の公開発表。

（７）平成１５年１２月　学習参観日において、保護者に向けて経過報告会の実施（ＴＴ指導に関する保護者のアンケート結果の説明と少人数学習・習熟度別学習への理解）

（８）平成１６年　１月　北海道帯広小学校（平成１５年度からの指定校）研修部長と学力向上フロンティア事業に関する情報交換会を実施

２　実施予定のもの

（１）平成１６年　４月　学習参観日において、保護者に向けて経過報告会の実施

（２）平成１６年　９月　中南管内対象の授業公開発表会を予定。
【発表会予定日…平成１６年９月１６日（木）】

３　ＨＰ作成等の工夫の実績及び今後の予定

・ホームページ　http://www.namiokamachi-amr.ed.jp/megasawa/

作成　平成１２年　４月
更新　平成１４年　４月
更新　平成１５年　４月
更新　平成１６年　４月（予定）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　☑７～１２学級　□１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　☑ 国語　□ 社会　☑算数　□ 理科　□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無